



Profile — 古畑和孝

1931年、金沢市生まれ。東京大学教育学部卒業後、東京大学大学院修士課程、イリノイ大学大学院博士課程修了(Ph.D.)。国際基督教大学、東京大学、帝京大学で教授を歴任。『よりよい学級をめざして』(学芸図書)、『好きと嫌いの人間関係』(有斐閣)など著訳書多数。趣味は大相撲観戦、クラシック音楽鑑賞。

1945年8月15日、無条件降伏で、第二次世界大戦の終結とともに、我が国の体制は根底から覆されました。教育制度改革もそうでした。旧制度は廃止、新制度が発足します。衣食住にも事欠く窮乏生活の真只中で、私は1950年、東大教養学部文一に2期生として入学しました。法学部への進学が予定されていました。しかし、かねて関心のあった心理学を、それも人間の心理学を学びたいと強く願いました。折しも、学制改革の一環として教育学部が誕生しました。伝統のある文学部心理学科ではなく、草創期の教育心理学科を志しました。

戦時中、心理学もまた外国との学問的交流は途絶し、戦後もその遅れは深刻でした。大学院に進学し、助手に任じられましたが、相次いで心理学・教育学の学会が東大で開催され、その準備から後始末にまで忙殺されました。もっと組織的・体系的に心理学を学びたいと希求しました。折から、イリノイ大学に留学中の先輩助手東洋先生が学位取得間近となり、私と

留学と人生

東京大学 名誉教授

古畑和孝 (ふるはた かずたか)

芝祐順君が推薦され、応募しました。イリノイ大学の書類選考により、フェローシップの授与が決まりました。しかし、旅費がありません。当時は自費など夢物語でした。幸いフルブライト委員会の大学院留学生試験にも合格し、ハワイ大学でのオリエンテーション・プログラムに参加の機会も与えられました。アメリカの大学院の在り方、生活様式などを学ぶ好機でした。1960年、真夏の4週間でした。

秋入学のイリノイ大学では、GREの結果、外国人学生用の英語も取らざるを得ませんでした。フルブライトは原則1年です。ですから、どうしても研究したいものに挑戦しました。1学期目には集団生産性のモデル構築中のI.スタイナーによる上級社会心理学、2学期目には集団力学でした。指定文献は膨大です。しかも受講は三人の米国人院生(博)と、留学1年目の私の四人のみでした。毎週二人ずつ、つまり隔週に口頭発表をします。最新の研究論文や研究書に基づいて。私は殊に資料を十分に用意して臨みました。

もう一つは発達心理学です。ユニークな業績をもって鳴るD.P.オースベルはあの浩瀚な「児童発達の理論と問題」をテキストに、大変なスピードでした。

フルブライトは原則1年ですが、先生方は継続を勧められます。2年目以降研究助手に任じられての研学となりました。この時点で、家内も大学院特別奨学生として、娘を祖父母に託して留学します。芝君は帰国し、代って池田央君が留

学し、以後3年間は共に励みました。3年次に入る時、赤十字社による「日米愛のリレー」で、2歳8カ月の娘の渡米も遂に実現しました。

大学院のシステムは適切に構造化されていました。レベル別に、また各領域別に、錚々たる多数の教授陣が十全な準備をもって指導されるのです。

博士の学位に至るには、いくつかのハードルがありました。まずは授業です。B以上の成績は必須でした。次の要件は語学です。独・仏・露の3カ国語の中から、2カ国語の能力を示さなくてはなりませんでした。

次は博士資格試験でした。(教育)心理学全般、統計学、各個人別の専門試験と、丸3日間にわたる試験でした。それらすべてに合格して、初めて博士候補者となります。その上で、五人の論文審査委員を前に博士学位論文の研究計画などに関し、口述試験が行われる仕組みでした。(社会心理学の泰斗T.M.ニューカムの愛弟子)P.J.ランケル、オースベル、スタイナーなどの指導に恵まれました。

博士論文研究では、私自身の考案になる課題を用いて、協同競争を対人魅力の変数との関係で実験的に吟味し、ほぼ仮説が立証されました。それを論文に仕上げ、最終口述試験を経て、Ph.D.の学位が授与されたのは1964年6月でした。

最も純粋に研学に専心し得た4年間でした。東大などで研究者の育成に微力を尽くしたのは、留学での深い学問的恩恵を少しでも還元したかったからでした。